

---

# アタシがアンタの自殺を止めます！！

ある日のあひる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アタシがアンタの自殺を止めます！！

### 【Nコード】

N3033Y

### 【作者名】

ある日のおひる

### 【あらすじ】

生きる目標無し、人生に意味なんて無い。世界はくだらないと思っっている高校一年生、夢谷信哉。その前に現れた、自殺願望が感じ取れる能力を持った女の子、時田可憐に、銃を向けられ人生最大の衝撃的な？ 出会いをする。はたして信哉はこれからどうなるのか？ 可憐の目的は！？

第一話 出会い。(前書き)

感想、アドバイス、気になる点、気軽にお願ひします

## 第一話 出会い。

俺は、ただの県立高校に入学した。別に高校に興味があった訳じゃないが、働くのは、嫌だったからな。今日は、入学式の次の日、一時間目、内容は、ホームルーム。右はじから、順番に自己紹介の真っ最中だ。

「 です。よろしくお願いします。」

「次」

はあく次は、俺か、ここは、普通に流しておくか。

「はい 夢谷ゆめたに 信哉しんや 趣味なし 特技なし よろしくお願いします」

そして、自己紹介も終わり、何事も無く、その日の学校が終わり、俺は、上履きを脱ぎ靴に履き替え、校門へと向かって歩く。俺の事なんか誰一人覚えて無いただろうな、まっ、友達なんかめんどくせえただけだけだな。はあくくだらない世界だな。

「死にて〜」

俺は、『その』な言葉を口にした。今思えば、そのの言葉がアイツを動かしたのかもしれない。

「やっぱり ちよつと！ 夢谷信哉！」

俺の背後から、俺の名前を呼ぶ女の声があった、そして、俺は、振り向いた。

「あつ？」

「あぐつ！？」

そこに居たのは、美少女と言っても、おかしくは無い、女子が居たが、その行動は、まるで『やくざ』だった。その女子は、俺が振り向いたら、いきなり、口に拳銃のようなモノをツッコミやがった。「なっ、何するんだ、いきなり」

「どやどやどやどや」

辺りに居た、数人の生徒が困惑している。

「ちよつと、アンタ達、騒がないでね、騒ぐと、穴が開くわよ」

俺の口に銃を突っ込んでいるコイツは、周りの生徒に怖い笑顔で言った。

「さてと、夢谷信哉 アンタ死にたいんでしょ？」

鋭い眼で俺の眼を見るがどこか、その眼は寂しげだった。

「ちよつと落ち着けて、どうせソレ偽物だろ、大人しく、口から離せ」

「偽物かどうか試してみる？」

「……………変わらない」

「パン！」

コイツが引き金を引くと乾いた音が辺り一帯に響き渡った。そして、俺の口から銃を出すと銃口から、米国の星の入った旗が出た。

「もっと、本物ばいの買えば良かったかしら」

「ふう〜やっぱ偽モンか、それにしてもエアガンやガスガンだったら、病院行きだぞ」

そしてコイツは、俺の腕を引つ張り、歩きだした。

「ちよつと、これから私に付き合いなさい！」

「何なんだ！？ お前は？ 一体何がしたいんだ？」

「お前じゃ無い、アタシは、時田 ときた 可憐 かれん よー！」  
こうして俺と可憐の出逢った。

つづく

第一話 出会い。(後書き)

感想、アドバイス、気になる点、気軽にお願ひします

## 第二話 アタシの『能力』（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

## 第二話 アタシの『能力』

俺は、学校から出ると、時田という奴に、近くの喫茶店に連れて行かれた。

「ご注文は、お決まりでしょうか？」

「アタシは、カフェオレ、アンタは？」

「カプチーノ。」

「はい、かしこまりました。」

んで、飲み物が着き、俺は、一口カプチーノを飲み、話を切り出した。

「え〜と、時田って言ったよな、さっきの学校でした事は、何だ？ どうして俺を此処へ連れて来た？」

俺は、時田に向かって質問をした筈だった。

「それより、アンタ死にたいの？」

質問に対して質問で返すのか？ コイツは、しかも何だこの質問は。

「質問に答えなさい、死にたいの？ 死にたくないの？ どっちなの？」

時田の目は、真剣だった、そして寂しげだった、だから俺は、今まで誰にも言わなかった事を時田に言った。

「どうでもいいんだよ、死のうが、生きようが、この社会、世界は、くだらない。俺には生きる目標も、意味も持ち合わせて無い。」

「アンタ、家族は？」

「小さい時に事故で、二人とも死んだよ。」

「あんた『も』大変なのね。」

時田は、そう言うと、俺の顔を悲しそうな顔をして見た。

「そんな顔で、俺を見るなよ。」

「えっ？」

「今、俺の事可哀そうな奴だと思っただろ、そう言うのが嫌いなんだ俺は。」

「ごめん、そんなつもりじゃあ……」

そう言うと時田は、少し下を向いた、ただの、頭がパーの奴ではないらしい。俺は少しほっとした。

「で、こっちの質問にも答えて貰おうか、さっきの学校でやった事は、何だ？ イタズラにしゃ度が過ぎるぞ」

「イタズラ何かじゃない、アタシは、アンタが生きたいんだか、死にたいんだか分からなかったから試したただけだ！」

「何で、初めて会った俺にそんなに構うんだよ」

俺がそう聞くと、時田は、口を開き答えた。

「信じてくれないかもしれないが、アタシは、ある能力が使えるんだ……」

「能力？」

「ああ、その能力は、他人の『自殺願望』が感じとれるんだ。」

「それは、余り便利などとは言えない能力だな、でも、おかしいだろ、俺から自殺願望が感じられたからって、あんな事をするか普通？」

「嫌、違うの、アンタは、普通の自殺願望がある人と違う感じがして、なんて言ったらいいかしら、例えば、普通の人が白だとしたら、自殺願望のある人は黒だとすると、アンタには、何も無いのよ、色が無い、そんな、普通じゃない感覚を感じ取ったから、アンタが生きたいか死にたいのか、確かめようとしたの、結局アンタの感覚は変わらなかったけど……」

成程、そう言う事が、色が無いか、あながち間違っただけかもしれないな。

「別に信じてくれなくても良いわよ、いきなり、こんな事を言われて、信じれる方がおかしい」

話しをしている最中、時田は、窓の外を見て口を止めた。

「ん？ どうした時田？」

時田の視線を追うとそこには、俺達の通っている制服を着た女子生徒が歩いていった。

「時田の知り合いか？」

「あの子、危ない、死ぬつもりだ、それもすぐに」

そう言つと時田は、立ち上がり、出口へ走って行った。

「おい！ 待てよ、時田！」

「ごめん、会計ヨロシク、アタシ行かなくちゃ！」

時田は、喫茶店を飛び出して行った。

「釣りは要らない！」

「お客様！？」

千円札をレジに置き、俺も時田の後を追って喫茶店を飛び出した。

つづく



## 第二話 アタシの『能力』（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3033y/>

---

アタシがアンタの自殺を止めます！！

2011年11月7日08時10分発行